

障害者スポーツにおける相互行為 ー車椅子バスケットボールに焦点をあててー

前田 朝美

1. はじめに

障害者でも楽しめるスポーツの一つに車椅子バスケットボールがある。車椅子バスケットボールも普通のバスケットボールと同じコート・ボールの大きさ、ゴールの高さでプレイしている。違う点といえば、車椅子を用いてバスケットボールをしているという点や、選手それぞれに各々の障害のレベルによって1.0~4.5の持ち点が与えられており、試合中コート上にいる選手の持ち点の合計が14点以下と定められている点である。

普通のバスケットボールと違い、車椅子バスケットボールではもちろん勝手がちがってくる。その要因はやはり車椅子を用いているからである。普通のバスケットボールと違って、車椅子本体の幅によって動くことのできる範囲が限られてしまう。しかし、車椅子バスケットボールの選手たちはそのような状況を上手く利用してプレイしている。

そこで、今回の分析を通して普通のバスケットボールとは違う、車椅子バスケットボールらしい動きを明らかにしていきたい。

2. 調査方法

平成11年度徳島大学総合科学部社会調査実習における調査で得られたデータを用いた。その中でも石川看護大学の阿部智恵子先生が撮影した、大学平成11年11月28日にT県勤労身体障害者体育施設で第29回内閣総理大臣杯争奪 日本車椅子バスケットボール選手権大会の試合を撮影したビデオを分析した。

3. 分析

車椅子を用いているというだけで、普通のバスケットボールとは違った点がみられた。その中でも今回はシュートのシーンに注目して分析した。

分析1. 片手シュート

【状況】白6番が片手でシュートを行う。



画像 1

本論において、両手シュートとはボールを放つときに両手がボールに触れている状態、片手シュートとはボールを放つときに片手しか触れていない状態と定義する。

画像 1 にみられるような片手シュートは車椅子バスケットボールではよくみられる光景であり、この試合の中でも何度かみられた。

普通のバスケットボールは腕だけの力でシュートをしているのではなく、膝を曲げるなど全身を使ってシュートをしている。しかし、車椅子バスケットボールでは上半身しか動かすことができず、シュートをするにはどうしても腕の力に頼ることになるため、腕の力が必要とされる。

では、それなのになぜ片手シュートをするのだろうか。これには、敵にブロックされにくいということが関連している。車椅子バスケットボールは皆が車椅子に座っており、皆がジャンプをすることができないということが前提にある。つまり、車椅子バスケットボールでは、上半身の長さで腕の長さで高さ勝負をしているといえる。上半身の長さで腕の長さでの勝負において、片手シュートができれば両手シュートよりもシュートを放ちやすい状態へと持ち込むことができるようになる。なぜなら、両手シュートだとどうしても体の真ん中から打つようになってしまいが、片手シュートなら体の真ん中から右寄り、あるいは左寄りというように中心からずれて打つことができるようになる。それにより、敵から距離を取れるようになり、敵のブロックを少しでもかわすことが可能となる。画像 1 をみても、シュートをしようとしている白 6 番は片手でシュートを狙うことで、右

斜め前にいる敵から距離を置くことが可能となっている。

しかし、片手シュートは誰にでもできるものではない。先ほども述べたが、片手シュートをするには腕の力が必要であることはもちろん、比較的状态を保つことが簡単にできるような選手でないとできない。敵から距離を置こうとして片手でシュートを狙うということは、重点をずらしてシュートを打つということであり、どうしても状態を保つのが難しくなってしまう。障害のレベルが重く、車椅子に座って動き回ることのできる精一杯の選手は、状態を保ちやすいように高さも低めに車椅子に座っている。例えば、持ち点が 1.0 とされる選手の基準は背もたれから体を離してプレイはできず、前に倒れた上半身を起こす時は手を使って起き上がるとされている。このように、状態を保つことすらも大変な選手たちにとって、片手シュートをするのは難しいと思われる。実際、この試合で片手シュートをしているのは状態維持が比較的簡単と思われるような選手たちであった。

片手シュートを身につけることでシュートを狙うチャンスが増え、有利な立場を築けるわけだが、片手シュートを身につけなくても有利な立場にいる選手もいる。ここで画像 2 をみてもらいたい。



画像 2

この画像は黒が両手でシュートをしようとしているのを、白が手を伸ばして阻止をしようとしている場面である。白は精一杯に手を伸ばしているが、黒の持っているボールには届いていない。

このように、周りの選手よりも背の高い選手、より具体的にいえば、周りの選手よりも手を伸ばしたときのリーチが長い選手は、片手シュートをしなくても十分に両手でゴールを狙うことができるという自分に有利な状況にもっていきやす

い。もし、こういった選手が両手シュートを身につければ、より敵から距離をおくことができるようになり、有利な立場を築けるだろう。

手を伸ばしたときのリーチの長さは生まれ持った体型や障害の重さに関係することなので、努力で克服できるものではない。だが、これこそ純粋な高さ勝負だといえるのではないか。

分析2. ブロックされても十分にゴールを狙うことができる

【状況】黒14番がシュートしようとしているのを白6番が阻止しようとする。



画像3



画像4



画像 5



画像 6

通常、その場で何秒間も動かずにゴールを狙うなんてことはできない。たいていは、狙いを定めている間にボールを叩き落とされるなりして阻止されてしまう。もしくは、ゴールにむけてボールを放ったとしても、敵にジャンプをされて阻止されてしまう可能性もある。しかし、この場面では 28 秒から 29 秒にかけて黒 14 番が味方からのボールを受け取り（画像 3, 4）、結局シュートを放ったのは 30 秒から 31 秒にかけてであった（画像 5, 6）。つまり、およそ 3 秒間その場で動かずにシュートを狙っているのである。

なぜ、黒はブロックされてもシュートを放つことができたのか。それは普通のバスケットボールに比べて、敵にブロックされないだろうと判断しやすいからで

はないか。先ほども述べたが、選手全員が車椅子に座っており、ジャンプができないため、阻止するには手をできるだけ伸ばすという方法しかない。手が届く範囲には限界があり、それ以上遠いものには触れることができない。その上、ジャンプなどといった、相手がどのタイミングでジャンプするのか、そのジャンプの高さはどのくらいかなどの読みづらい動きというものが少ない。そのため、敵の手が届く範囲というのは、敵が手を伸ばしてきてシュートを阻止しようとする動きからある程度予測することができる。また、選手それぞれが座っている車椅子の幅により、普通のバスケットボールほど密着することがない。

ある程度の予測ができれば、少くくろいブロックをされても落ち着いてゴールを狙うことができる。だが、これも誰もがができるわけではなく、背の高い選手ほどできやすい。



画像 7



画像 8



画像 9

この場面では味方からパスを受け取った選手がシュートをしている。先ほどの場面と違う点は、シュートをした選手はそれほど背が高くない点と、ボールを受け取って1秒後にはシュートをしている点である。この試合中でこの選手は何度かシュートを放っているが、そのほとんどがボールを受け取りすぐにゴールにむけて放っている。もし、この選手が何秒間か動かずにゴールに狙いを定めていたとすると、敵にボールを叩き落されてしまう可能性が高いだろう。このように、背の高い選手に比べて、背の低い選手は十分にゴールに狙いを定めることのできる時間が短くなってしまふ。

分析 3. シュート動作に入ると敵はブロックをやめる

【状況】黒 14 番がパスを受け取り、シュートをしようとしているのを白 10 番はみているだけ。



画像 10



画像 1 1



画像 1 2



画像 1 3

敵がシュートをしようとしているのをただ見ているのでは、相手にゴールを決めて下さいとっているようなものである。普通は相手にゴールを決められないためにもブロックなどをするものである。しかし、この場面では、白 10 番は手を伸ばす、ジャンプするなどといった動作をしておらず、黒 14 番がシュートするのを阻止しようとする姿勢がみられない。

この場面で注目すべき点は、黒 14 番がパスをもらった時点で、白 10 番は阻止しようとして手を伸ばしても届く距離にいないことである。普通のバスケットボールだと少し距離があったとしても、ジャンプをすれば阻止できる可能性があるが、車椅子バスケットボールはジャンプができないため、少し離れた位置にいた場合、とっさにブロックをすることができない。ブロックをするための前段階として、まずは近づかなければならず、近づくためには車椅子を動かさなければならない。車椅子を動かすためには手で車輪を回す必要がある。車輪を動かしている間、手はふさがっており到底ブロックなんてすることができない状態でない。相手に近づいてからようやくブロックができる状態になるのであり、そのときには相手はシュートを放っている可能性が高く、手遅れになることが考えられる。

そういったことがあり、白 10 番はとっさにブロックができる状態でなく、黒 14 番の近くにたどり着いたときには、すでに黒 14 番はシュート動作に入っており、時すでに遅しという状況だったのである。

また、たとえ相手のすぐ側におり、近づく必要がない場合でもブロックをやめしてしまう状況もある。それは分析 2 の言い換えのようなものだが、シュートする人がブロックされないだろうと予測できるのならば、同時に阻止しようとする人はブロックできないだろうとを感じる。特に背の高い選手のブロックをするときには、ブロックできないと感じる気持ちも強くなりうる。もちろん、たとえボールに触れることができなくとも、相手がゴールに狙いを定めにくいように視界に入るところで手を散らかせるだけでも、シュートする人にとってはプレッシャーとなる。

4. まとめ

分析を通して、車椅子バスケットボールならではのシュートシーンを形成しているのは、車椅子バスケットボールの特徴の一つであるジャンプができないという点である。ジャンプができないということは身長のごまかしができず、等身大で戦うということである。そのため、お互いに手の届く範囲などの限界を認識しやすくなる。このような上半身と腕の長さでの高さ勝負において、どのように自

分たちが有利にシュートを入れることのできる状況、あるいは、どのように相手がシュートを入れにくいような状況にもっていくことができるかという戦略を考える必要がある。それは、普通のバスケットボールでも考えられていることだが、車椅子バスケットボールならではの戦略もあるだろう。

今後の課題として、どのようにして自分たちにとって有利な状況に試合を展開しているかという点を明らかにするために、パスの仕方やポジションの取り方などをみていきたい。それによって、車椅子バスケットボールらしい戦略がみえてくるに違いない。

—謝辞—

論文を執筆するにあたり、指導教官の榎田美雄先生をはじめとして、夏のゼミ合宿では遠いところからお越しいただいた上、貴重な意見をいただいた中塚朋子先生に感謝の意を申し上げます。そして、一年間ともにゼミ論集作成に取り組んできたゼミナールの方々にも多いに助けられ、深く感謝している。末筆ではあるが、謝辞の言葉に代えさせていただきます。

- 参考文献**・榎田 美雄 編 2000 年 『障害者スポーツにおける相互行為分析 —平成 11 年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書（第一版）—』 徳島大学総合科学部人間社会学科国際文化研究コース 現代国際社会分野『社会調査実習報告書』刊行プロジェクト
- ・財団法人 日本身体障害者スポーツ協会 編 1998 年 『全国身体障害者スポーツ大会競技規則集』 財団法人 日本身体障害者スポーツ協会